

〈学術論文〉

「民話のふるさと」ともうひとつの〈民話〉

野村典彦

岩手県遠野市の観光は、柳田国男の民俗学の上に成り立っている。本稿では、民俗学に期待されたものを視野に入れながら、村々・人々を訪ねた文章として民俗学徒の書物を読むことよって、「民話のふるさと」

遠野が発信していた「民話」の可能性を再考する。「民話」の周辺に多くの読者を持っていた宮本常一を補助線とする。それは、民俗学における「語り」の問題を

一 庶民の発見―宮本常一にとつての民話
戦後の「民話」はたたかうものだった。五二年の『歴史評論』通巻三七号は「義民特集」を組む。佐倉宗五郎や田中正造に関する文章に混じり、「民族解放斗争に倒れた英雄 近藤巨士君」の記事がある。「血のメー

デー」に命を落とした法政大学生に対する、民主主義
 科学者協会第七回大会における追悼の言葉だ。

民話運動は、木下順二「夕鶴」を出発点とし、木下
 の「民話管見」が理念として大きな影響を残す。この
 「民話管見」も収められた、民話の会編『民話の発見』
 (大月書店・一九五六)について、宮本常一は「民話
 の発見は同時に農民の発見でなければならぬと思っ
 ている。しかしこの書物ではまだ農民を外側からなが
 めて、それぞれの立場から物を言っている」と厳しく
 評する(宮本・一九五六a)。「本当の農民生活とか農
 民の意識にふれた方も居ないようである」^{「マヤコ」}。机上の学
 問だと批判しているのである。

「権力者」「資本家」といった議論のための言葉では
 捉えられない「日本人」の物語。宮本の〈民話〉はそ
 うした焦点を結ぼうとしていたのではないか。松谷み
 よ子を導いた瀬川拓男が「足の民話」「創作の民話」
 を志していたことは既に確認した(野村・二〇二二)。
 ここではまず、雑誌『民話』の編集委員を務め、瀬川・
 松谷編『日本の民話』全十二巻(角川書店・一九七三
 (四)の監修を務めた宮本の著作にもう一筋の〈民話〉

を読み取りたい。

代表作『忘れられた日本人』は『民話』への連載「年
 よりたち」^{「ま」}に基づく。読者に対し直に語りが投げかけ
 られる文章が迫力と真実味に富む。「土佐源氏」など
 では、自身の人生を言葉にする語り手、筆を執る語り
 手が冒頭から融合・一体化しており、読者は「年より
 たち」の人生を生々しく体験することになる。

宮本は「学界における定義がそうなっているわけ
 ではない」と留保しながらも「民話を一応口頭伝承
 のうち散文的なもの一般と解して」話をすすめる姿
 勢を持っている(宮本・一九五六b)。その上で、『芸
 備地方史研究』(第三一・三三三合併号・一九六〇)「特
 集 民話」巻頭に置かれた「民話の意義―身辺の中に
 ある歴史(2)」ではこう言う。「戦後の民話はこれを
 必要とする人々が、村里の古老からじかに耳をかたむ
 けて得たものでなく、古老からきき出して整理せられ
 たもの、あるいは脚色せられたものを利用して見出し
 したのである。しかし、それは民話の発見であつても
 民衆の発見であるとは言い得なかつた。これらの伝承
 をもちつたえている古老たちの世界は、戦後の進歩的

な人にとつては固陋であり、封建的であり、否定せられるべき世界としてうつっていたからである。(中略)民話は民話が民衆の中に生きている姿をつきとめてこそ、初めてほんとの価値を生ずるものであつて、そうでない限り、自己の意志や思想をつたえるための手段や道具にすぎなくなる」。

これら民話についての文章が単行本にされるとき、書名が『庶民の発見』(一九六一・未来社)となつたことについては注意が払われてよい。そして、「農民の発見」「民衆の発見」の向こうに〈忘れられた日本人〉の発見を見渡したい。地方史研究の中に「庶民資料」「庶民生活」といった用語が行われていた影響もあると思われるが、「常民」でも「民衆」でもない言葉として「庶民」が選ばれ、「庶民のねがい」「王朝の庶民」などと一冊にまとめられた。結果として印象が弱くなり、口承文芸研究は宮本が〈民話〉を発見していたことを見失うことになる。巻頭に置かれた「庶民のねがい」^{注2}における、丸山^{かわる}夏についての記述などは、「年よりたち」のイメージが『民話』という媒体と出会う以前から抱かれていたのだろうと思わせる。

同じ書に収められる「伝承者の系譜」は『民話』創刊の直前に発表された。「民話」について、「戦前の研究とは大したつながりを持たずして出発し、(中略)民話が教育材料としてもまた読み物として世間の注意をひくようになると、その発掘作業も再開されて来たが、それは依然としてもとの民俗学徒たちが担当することになった。そして現状では発掘者と理論づけしうとする人々とは別個の範疇に属しており発掘者との間に感覚的なズレが見られる」(宮本・一九五八)と批判する。読者と「発掘者」との間が、「理論づけしうとする人々」によって切断されると憂うのである。

二 民俗学徒の足どり

「理論づけ」を、「戦後の進歩的な」運動に限定して理解したいところであるが、民俗学の成果は必ずしも褒めそやされてばかりいるわけでもなかった。たとえば、吉本隆明は「共同幻想論」の中で、「かれらは民話や伝承を蒐集し、分類し、分布をしらべ、その分布を同一系統にまとめようとするか、あるいは具体的な交通の結果としてかんがえようとする」(吉本・一九

六六」と批判している。

岩崎美術社から刊行された「全国昔話資料集成」(一九七五―八四・全四〇巻)は、関敬吾の分類(『日本昔話集成』)との「話型対照表」を巻末に付した。それまでに蒐集した資料を、まさに「分類し、分布をしらべ、その分布を同一系統にまとめようとす」と科学的な学問に対応した集成である。

ただし、その巻末には「編者ノート」も用意されていた。三一巻『吾妻昔話集』(一九七九年六月)「編者ノート」冒頭に、榎谷明は次のように記す。

「国鉄吾妻線の長野原からバスに乗り換えて約二十五分、小雨という部落に到着する。ここが吾妻郡六合村の役場の所在地である。そこから五分程で荷付場という所に出るが、ここで道を西にとれば草津に入ることになる。バスは急に細く峻しくなった道を進み、長野原から五十分で終点の花敷温泉に到着する。(中略)花敷温泉の近く、引沼が入山の中心部落で、商店も数軒あるほか、創立百年を超える小学校もここにある。これより奥の部落へは、いずれも歩いて行かねばならない」。

民俗学研究会の高校生を率いていたのかもしれないが、榎谷一人がバスの行かない集落を目指した足どりのように、読者には感じられもする。前年の秋、日本交通公社発行の雑誌『旅』(第五二巻第十号)の特集は「バスの行かない温泉」である。カラーのグラビアページに三苦正勝撮影の「九重山中に湧く法華院温泉」とともに掲載された岡崎悠多楼の文章は「交通の発達で、秘境^①がほとんど開かれている昨今だが、九州の中央、九重連山のまつ只中に湧く法華院温泉こそ掛値なしの、秘境の湯^②と言えよう」と書き起こされる。

七〇年代の読者は「秘境」に惹かれていた。^{【注3】}
 七一年、『an・an ELLE JAPON』第二巻第二二号の十條キンバリー(クリネックス)提供の記事「私のアンティーク 妻籠」には、囲炉裏端で古老の話を聞く若者の姿が見開きのカラー写真で掲載されている。「柳田国男ブーム」「民話ブーム」などの言葉もあった。今日でも民俗学の基本図書である岩崎美術社の出版物は、全国の図書館の蔵書とされ、商業的に成立していた。「民話のふるさと」が作られてゆく後景に、ディスカバー・ジャパンに浸っている日本社会の有り様が

指摘できる。

ともあれ、昔話は語り手だけでは成立しない。岩倉市郎「採集日誌」(『沖永良部島昔話』一九四〇・民間伝承の会)を必読の資料とする口承文芸研究は聞き手の視座を持っていた。

宮本が「戦前の研究」と表現した時期の聞き取りは、必ずしも異郷で行われてはいない。ムラを聞き歩き文字に記すことのできる人々が各地から報告を寄せた。そうした中、四一年に始められた食習調査について、柳田周辺の高木誠一への篤い信頼が残る。¹⁾

戦後の「年よりたち」連載における最後の一人がこの高木である。郷土で調査を続ける高木を、宮本が『民話』誌上に「文字をもつ伝承者」として紹介した意味は決して小さくなかったはずだ。篤農家のネットワーク化が戦後農政の転換によって消し去られたことへの異議申し立て(「木村・二〇〇六」というような読み方もあるが、本稿においては、宮本が「民俗学徒」をみていることに注目する。あるく者の積み重ねが踏みにじられることを宮本が認めなかった、と考えてみる。

机上でやりとりされるソビエト発の言葉に背を向

け、学問への静かな志を秘めた民俗学徒の思いを聞きに高木を訪ねる。おだやかに生きる純朴な日本人を紹介する宮本の筆は、搾取される貧しい人々を議論しようとする人々の期待とは重ならない。あるいは、民俗学徒が「村里の古老からじかに耳をかたむけ」聞き取った庶民の生活が、書齋で項目化される過程で消えているので、資料として知る「福島県草野」の暮らしを確かめに赴いたのか。個々の人生を刻んだ「年よりたち」の顔を見ながら聞き手が感じていたはずのものに思いを重ねるため、読者として「感覚的なズレ」の生じないように赴いたとも言えよう。「本当の農民生活とか農民の意識にふれた」聞き手の存在の手応え。宮本常一の〈民話〉をそうした〈語り〉だと考えてみたい。

会議室や書齋の学問ではなく、「庶民の発見」の重要性を訴える。「年よりたち」を訪ねる者への敬意は、自身の足どりについての自負に裏打ちされていることだろう。「民俗学徒」、それは、入村する徒である。

三 「入村記」―聞き手の〈語り〉

大庭良美が『民話』二二号（六〇年六月）に寄せた「日かげの村―島根県鹿足郡日原町聞き書き（二）」は、宮本常一の「年よりたち」の最終回に連続して掲載されている。

「年よりたち」最終回。宮本は、草野駅で下車し、駅前で道を聞き、丘陵を歩き、厩から肥出しする農民に高木の家を尋ねる。一方、大庭は「しばらく行くと下の谷端に一軒見えてきた。そこから谷にそうて出ると小さなお宮があり、ぼつぼつと四五軒の家がある」と導入する。これらはともに、年よりに出会う足どりの家から語り起こされる文章なのである。「豊田島三郎老人の家は一番下もで、腰の曲った老人は、わなでとつたと見えて、三羽のツグミをぶら下げて、羽をむしりて行くところであった。（一月三十日）」と締めくくつた後、「私は今年八十一で」と、文章は自然に「私は」を主語とする「です・ます」体のものになる。こうした構成は、「三畝のはなし」、下瀬顕造を語り手とする報告でも重ねられる。

『民話』の編集委員を宮本に依頼に行った吉沢和夫

は、指示を受ける以前から宮本の存在を知っていた。『河内国瀧畑左近熊太翁旧事談』が印象に残っていたからだという。「人間が書き込まれているんですよ、あの聞き書きには」と、その「感動」を吉沢は回顧する（吉沢・二〇〇三）。『民話』編集の会合においても、益田勝実らに同書が高く評価されていたと、吉沢は述べている。

アチツクミユーゼアムから「彙報二三」として三七年に刊行されたこの書を、まずは開いておこう。巻頭の写真。ピントの合わせられた顔には皺も見えてしまふものの、前を合わせていない胸板は日に焼けた張りのあるたくましいものであるように感じられる。

「例言」一項めをみると、「左近熊太郎翁の談話を分類筆録したもので、大體山村生活採集手帖によつたとある。――『郷土生活研究採集手帖』（比嘉春湖編・一九三五・郷土生活研究所）について、表紙の表記に合わせ『採集手帖』と本稿では呼ぶ。――『採集手帖』に「特種食物を造る日」「晴着を着る日」といった項目はあっても、日付順に並べられた年中行事の項目はない。しかし、三六年八月下旬には、若者組、婚姻、

葬制といった内容の他に年中行事についての聞き取りを、宮本は行っている。本文中には「九月から日本民俗学の講習会が初つて、土曜日からの入村はむづかしくなつてしまつた」と三六年初冬の記述もある。宮本は柳田の構築しようとする学問を積極的に学んでいる。例言の結びには「民俗語彙は柳田先生の民間伝承論に従つて一・二・三の部門に分けて見た」とある。

だが、宮本は「民俗語彙」の収集ばかりをしていたわけではない。「旧事談」の目次を見ると、『採集手帖』の「一、村（部落）の起りについて何か言ひ伝へがありませんか」に対応した「村の起源」の報告に始まる「村の口碑」節がある。その後を見ても、『採集手帖』の「一村の功労者」「三 大事件」といった項目が確かに反映させられている。しかし、これら節の前に「左近翁自叙伝」がまず配置されるのである。「話者の姓名、年齢、性別、職業を書いて下さい」とのみ『採集手帖』「採集上の注意」に指示される「話者」について、それだけで済ませようとはしない。宮本の実践は、決して「採集」というものではなかった。

「例言」二項めには「各項の下にある○の中の数字

は入村度を示すもので、これによつて採集が如何に進められたかを示さうとした」とある。宮本には「語彙」ではない発想があつた。先ほど引用した「例言」一項めは、二文め「併し翁の語るに任せたの書き集めた為話の分類整理に十分力をつくすことが出来なかつた」と続く。「例言」にはまず、「談話」という捉え方と「語るに任せた」という聞き方が示されているのである。ただし、「翁が喋つても要なしと思ふものは筆記しなかつた。筆の動く間はそのためにウンと減つた。翁も心得てゐて、筆がとまると話を戻す様にした」（三六年八月）との記述もある。「語るにまかせた」は、項目による整理とは異なる実践を報告する表現だと理解すべきだろう。

そもそも、先ほど確認した「左近熊太翁旧事談」の前には、「河内瀧畑入村記」が用意されている。民俗学徒という聞き手の足どりである。当然のことながら、四十年後の榎谷明の「編者ノート」も、こうした民俗学徒の学史の延長線上に執筆されている。

バスを降りた宮本は河内瀧畑へ入村の際に、「平入」「妻入」と家の作りようを見ながら歩く。「道ばたの墓

場」をカメラにおさめる。水力発電の歴史も聞く。そして、「たゞ単に老翁の語るところを書き集めて世に公にし、大阪の山村にもかゝる古風なものがあるといふ事を告げようとするのが私の目的ではなく、この村興隆の資たらしめたい」という「念願」を示す。『採集手帖』「趣意書」にある「今日古風と謂はれてゐる村人の生活様式の中から日本人の精神生活の根源を探り出したいと思ひます」という姿勢との違いは明白だ。

「左近熊太翁旧事談」に入つて、最初に用意された「左近翁自叙伝」では「私は」という主語による〈語り〉が記される。日本地図をひろげ俯瞰した視野の中に点を落とすのではなく、あるいは年表をひろげて領有・所轄した視点から捉えるのでもなく、入村した聞き手が向き合っている「私」の足どりによる位置づけから「この村」を描き始めるのである。

「入村記」という「民俗学徒」の視点から語り起こされ、途中で「私は」という〈語り〉へとなだらかに接続されていく。そして、読者は民俗学徒とともにその〈語り〉を聞く。『河内国瀧畑左近熊太翁旧事談』はまさに大庭良美が範とした叙述であるはずだ。

「根源を探り出したく」民俗語彙の採集が企画されていても、民俗学徒は人と向き合っていた。もう一例、戦前の文献の中から、高田十郎『随筆 山村記』を開いておきたい。

雑誌や新聞に掲載したものなどから構成され、読者を強く意識した文章である。「随筆」なので、「私は」という主語にはならない。「□□にて」と、執筆した場が示される。「じかに耳をかたむけた」一日を終えて、宿屋の燈の下、筆を執る高田の声に読者は耳を傾ける。「(一)大峯だより」の章は、「大峯奥駈」の記録。容易に体験できる足どりではないが、景観、自然、同行した人物などを、高田の筆は現地からの語りとしてありありと伝える。「私」を登場させず、筆者が語りを引き受けて、自らの見聞として山村の生活を綴る。

〔四〕十津川日記「章の「十津川の年中行事」節では、「豪雨に降りこめられて、同じく文武館内に宿つてゐた深瀬義廣君や裏巽久光君などが来て、いろ／＼と土地の話をして聞かせる」と、話題がもたらされた状況の説明に始まる。この章は「奈良の新聞「新大和」」に連載したものである。記事の導入部にあつて読者を聞き

書きの場に誘導する記述といえるだろう。

人と向き合う民俗学徒の歩みは、おそらく戦後のルポルタージュにも通ずるものであろう。戦後の日本社会に形作られていく「ルポルタージュ」という記述のあり方が、宮本常一の仕事に影響を与えているはずだとの指摘は既になされてきた（大月・一九九五）。民話運動と重なるところでは、齊藤隆介のルポルタージュ作品について、間所瑛史が「国民文学」という意識、「〈通訳〉した語り」による「独談義」という表現から分析を試みている（間所・二〇一八）。サンカヘの注目も、同様の文脈に配置すべきものであろう。歩く身体、そして、語る身体・聞く身体が、こうした記述には宿っているのである。

四 「語る」こと、心を動かすこと

ここで、「語る」という営みについて考えておこう。「説話」について柳田は「一人が多くを語り、他の人々が黙つて受返事だけをして居るもの」であると『口承文芸史考』に言う。「語る」ものを「ハナシ」（＝説話）と呼称しているのであるが、これが「昔話」であ

る。屈折した語の選択がされているが、「童話」「民話」の用語が行われていたことを背景に見ておくべきだろう。柳田と関が、昔話研究のために世間話をも聞くという基本姿勢であったことは、別稿に確認した（野村・二〇二一）。「自由なものいい」である咄を、「昔話や伝説と比較検討すべき資料」としてではなく、「世間話を世間話として取りあげ、その型を整理しなければならぬ」と説いたのは大島建彦。本格昔話・完形昔話が「語り」であるのに対し、「動物話」「笑い話」は「自由ななしぶり」であって「一段と咄らしい話」であり、「さらに世間話になると、もつとも咄らしいものいい」と位置づける。（大島・一九六三）。その後野村純一は、語りとはなしを非日常（神の訪れる晩）と日常とに重ねた。この枠組みが構築される過程に、「比較的安定した話柄や型、あるいは主題」に注目しながら、「民話」の語を「話」の意に限定して捉える姿勢（野村純一・一九七五）を確認できる。《昔話／世間話》と機械的に分節するのではなく、『かたる／はなす』という区分けが、囲炉裏端の昔話伝承を生で知る研究の中で重んじられていたのである。「世間話」を「型」から解

放する提言は八〇年代終盤である。^{【註5】}

「うたふ」力については、『古今集』『仮名序』に示される通りである。「後世筆と懐紙との事業になって、心持ちが大に違つた」（『民謡の今と昔』）ものになるにせよ、「白峯」に描かれる通り西行のウタは崇徳院を鎮めることができた。柳田国男は「労働には笑ひがあり元気があり、機械もいやがる様な厄介な仕事で、兎に角まだすら／＼と進んで居る」とウタの作用を表現する。田の神の心を動かすのみならず、ウタは現場にあって人々の労働を支えた。柳田はこの「民謡の今と昔」（一九二七）と同じく、『日本文学講座』の「科外講話」に「昔話解説」（一九二八）を発表する。「農民文学」に親しみ『民謡・民話』の視界を持つ新潮社の読者を前に「口承文芸」研究が組み立てられた。戦後になって、恋愛起源に立つ白田甚五郎は「うた」の再活用だと「うたふ」を説いた。「かたる」は「かつ」の再活用と言った。「かち栗」の「搗つ^か」だと教えられた記憶が私にはある。

「神話」の零落と捉えるか否かはともかく、「語り」は「自由なものいい」ではない。義経に仕えた常陸坊

海尊を引くまでもなく、語り手がいるから物語が届く。

昭和五年生まれの渡邊昭五は、約六〇〇キロをソ連軍から逃げた際に自らが伝聞した「凌辱説話や自決の話」を取り上げ、「歴史には、語り手がいなければ、事実が消えてしまうという一つの例である」と述べる（渡邊・一九九五）。「民話」における〈語り〉を考えるにあたり、「けり」「き」という文末については、この後「遠野物語」を聞くところまで持ち越したい。よってここでは身近にある映像作品に語り手・聞き手を見てみたい。

実写版『アラジン』（二〇一九／配給・ディズニー）。語り手はアラジンに仕えたパパ。ランプの魔人ジーニーは三つめの願いによって解放され、結婚して子どもたちと船に乗った。聞き手の子どもたちは物語の途中で寝てしまったようだが、さらにその隣、あるいは外側に聞き手を考えるべきか。

北原白秋について語ることを拒む山田耕筈から聞き出す女性記者をも描いたのは、『この道』（二〇一九／配給・HIGH BROW CINEMA）。私たちは彼女から聞いたのか、それとも彼女とともに聞いたのか。

成功者を讃えるばかりが語りではない。『八甲田山』（一九七七／配給・東宝）の語り手は、海軍よろしく逃亡した村山伍長。語られているのは冷静な指揮をした徳島大尉ではなく、遭難した多くの兵卒だったはずだ。だが、彼らとて忘れられてはいない。彼らを忘れさせないために、村山伍長は生き残らなければならなかったのである。

『男たちの大和 YAMATO』（二〇〇五／配給・東映）、語り手は年少兵だった神尾克己。生還した神尾は戦死した西の母親を訪ねる。田中丸勝彦の仕事（田中丸・二〇〇二）を思い出しながら、「語る」という行為の意味を確認しておきたい。むすびには、神尾の言葉として「やっと生き残った意味がわかりました」が用意されている。画面を見る私たちは、聞き手である内田守二等兵曹の娘とともにその言葉を聞く。戦災孤児を養育した内田兵曹は映像作品中で主に描かれた人物である。そして、神尾老人の部下である少年、敦が神尾の語りを聞き届ける。彼はいつの日か、語り手になるはずだ。映画は、聞き手が語り手と出会う足りを冒頭に描く。

五〇年代に戻ろう。「血のメーデー」に命を落とした学生があつたことも、語られなければ忘れられてしまう。終戦から十五年という時期に、現実はこの列島に生活するところの、語られることもない人々に宮本は目を向けた。英雄を語る者は来訪する。だが、語る者のいない、忘れられる人々には訪ねなければ会うことが叶わない。宮本の目指した「庶民の発見」とはそんな足どりの記録ではなかるうか。

「異常誕生」「異常成長」は必要ない。彼らは英雄ではなく、〈忘れられた日本人〉なのである。語る人を得て忘れられずにいる者を彼岸に置き、宮本は「忘れられる人々」を〈語る〉ことによって忘れさせまいとした。「日本人」を再考させられていた時期であり、『民話』も創刊号巻頭に「シンポジウム 日本人」を置いた。宮本が各地で出会ったそれぞれの老人が、「日本人」という問いへの答えとして描かれ、一人ひとりの生き方が誌上に重ねられていった。それが、「民衆の文学」「国民の文学」としての「年よりたち」だったのである。忘れられることを「無縁」と言い換えれば、それは民俗学の重要な問題であり、少子超高齢社会を生きる私

たちの切実な問題でもある。

五 現在の事実という「物語」

『全国昔話資料集成』は「責任編集 白田甚五郎、関敬吾、野村純一、三谷栄一」として刊行された。関が『日本昔話集成』（角川書店・一九五〇（五七））によって話型整理を遂げたことは既に確認した。三谷栄一は青森県を歩きながら物語文学の世界にも通じる「語り」の学問を展開。「とんと昔」を「尊と昔」、「どつとはらひ」を「尊と祓ひ」と考える（三三谷・一九五二）。「語り」の「宗教的な厳肅さをもつた雰囲気」を知らしめる重要な論考だった。

『民話』誌上には「民俗学は、かつて、一人の具体的な農民の生涯、一人の具体的な漁民像、その胸中の悲喜の歴史を追求したことがなかった」との言葉も残る（益田・一九五九）。五〇年代の口承文芸研究は、まだ「語り手」の学問を組みあげていない。『河内国瀧畑左近熊太翁旧事談』に感銘を受ける戦後の「民話」は、「村の歴史、工場の歴史」そして「母の歴史」を民衆の手で描こうとする国民的歴史学運動の中から

生まれてきた。先に触れた通り、『民話』は「日本人」を考える視点を持ち、「民衆」に向き合うものだった。表紙の切り絵はいつも人物である。^{〔註6〕}そして、写真ページには、この運動に携わった人々が何を問題にしていたかが如実に示される。安保反対斗争のある日（二三号）、百里基地に反対する農民（九号）、朝鮮への帰国船の出港（一九号）、中華人民共和国の豊かな実り（四号）。満蒙開拓義勇隊の人々が帰国後の開拓地で営む生活（五号）、浅草を走るゴミ収集車（二二号）。裏表紙の広告は溝上泰子『日本の底辺』。共産党の影響を批判することが建設的とも思われぬ。現実の社会・貧しさと向き合う姿勢を評価すべきだろう。

「年よりたち」は、こうした雑誌に掲載された。だから読者は、「厄難」続きの人生の中に窺われるかけがえのない輝きを感じる。「文字をもつ伝承者」が注目されなかったとしても致し方あるまい。土佐源氏（『民話』一一号）、左近熊太翁（同、一七号）が（忘れられた日本人）として印象に刻まれてきたのである。宮本は柳田国男の「民話」が「昔話」と「イコール」であると理解している（宮本・一九五八）。その上で、

「自己の意志や思想をつたえるための手段や道具」となっている机上の「民話」への批判として、入村した民俗学徒が「じかに」聞いた目の前の「日本人」の言葉、「二人の具体的な農民の生涯」「現在の事実」の声を文字にして〈語る〉。「口承文芸」という「けり」の文学とは明らかに一線を画すものであるところの宮本の〈語り〉に、もう一つの〈民話〉を見出しておきたい。筆を執る民俗学徒の向こうに、入村する視野があり、いつの間にか「私は」を主語とする人生の言葉へ受け渡される。幾重にも重なる語り手による人々の暮らしの〈語り〉。読者の期待の高まりは、そうした〈語り〉がもたらしたのではないか。高木誠一の報告を全国を見渡す一事例とする柳田の学問は、こうした民俗学徒の実際を排除していた。だが、「先づ目映ずる」、「耳に聞こえる」と言葉を換えてみれば、柳田がこの感興を知らぬはずがない。日本民俗学の初動を一点にのみ捉えるのは適当でないにもかかわらず、『遠野物語』が、第一歩として想起されるのは、いかにも読者の胸をうつ民俗学の叙述であったからである。

では、ここまでみてきた民俗学徒の記述を手がかり

に『遠野物語』を読んでみる。「序文」には「すべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり」とある。しかし、『遠野物語』の本文に鏡石君の気配はない。『遠野物語』の語り手が「けり」と言わないのである。「佐々木氏の祖父は」などと言われた時、彼から聞いた話だと思い出される程度だろう。村名、人名の紹介の仕方。『遠野物語』の語り手は、事件があったことを知っている。「二一九」では「獅子踊りに古くより用ゐたる曲」を、「村によりて少しづつの相異あれど、自分の聞きたるは次のごとし」と紹介する。この「たる」は地元の人が「じかに」語っている存続の感覚なのではないか。

序文にある「感じたままに書きたり」を、自分が遠野に暮らす人から聞いたように、と理解してみよう。語り手は、「昨年八月の末」に遠野を訪れた「柳田国男」なのである。佐々木鏡石君を書斎に招いた聞き手としての柳田国男が、遠野を訪れた語り手「柳田国男」と入れ替わっていく。そこにあの序文の仕掛けがある。読者は遠野から語り手「柳田国男」の言葉を聞く。まさに、「入村記」としての序文である。そして、読者は筆を執る語り手と重なりながら遠野の人々の語り

「じかに」聞く。あたかも遠野の旅館で執筆されているかのように錯覚さえされてしまうその文章は、「し」で表現される^{〔注〕}「現在の事実」である。

六 「話になるやうな話」と「現在の事実」

『遠野物語』の序文において、「現在の事実」の説明に「わが九百年前の先輩『今昔物語』」との比較がされる。「人の耳を経ること多からず、人の口と筆とを情ひたることはなはだわづかなりし点」の強調。これは「今は昔」の説話文学であることを否定するものだ。『遠野物語』は、決して「けり」の文学ではない。また『山の人生』第一話では、「自分の説かうとする問題と直接の関係は無い」話であるにも関わらず「隠れた現実」を考える。「あの偉大なる人間苦の記録」が忘れられることを憂う。

あるいは、被災地を一九二〇年に訪れた「二十五箇年後」(「豆手帖から」)では、「死ぬまじくして死んだ例も固より多かるうが、此方は却て親身の者の外は、忘れて行くことが早いらしい」と言う。柳田は目にした現地の生活を喩えに、「歴史にもやはり、烏賊のな

ま干し、又は鰹のなまり節のやうな階段が有るやうに感じられた」と表現。「大体に於て、話になるやうな話だけが、繰返されて濃厚に語り伝へられ、不立文字の記録は年々に其冊数を減じつゝ、あるかと思はれる」と嘆く。直前で紹介している「珍らしい話」は今日にあっても『風俗画報』一一九号に読むことができる。「風呂桶の儘に浚はれし」と伝えられたこの話も、「語り伝へられ」ていくうちに「し」ではなくなつてゆく。明治二九年の海嘯について「さうである」を繰り返した柳田は、「三陸一帯によく謂ふ文明年間の大高潮は、今ではもう完全なる伝説である」と言う。「鰹節」「鰻」として干し上がってしまったということなのだろ

う。干物ではなく「目前の事実」を伝えようとするこうした語り手は、「けり」で述べられる「話になるやうな話」だけでなく、〈忘れられた〉「偉大なる人間苦の記録」をも視野に入れた、入村する旅人である。

『民話』の編集委員であった益田勝実は、『説話文学と絵巻』(一九六〇・三二書房)において宮本常一の「伝承者の系譜」を注に示し、自身の説話文学研究に宮本

の着眼が反映していることを明かしている。そして、『口承文芸史考』をひきながら「世間話」の重要性を説く。「説話の世界」の章には、「話にならない話」の節を設け、「話にならなかつた話」（「世上の噂話」と「語り継がれていく話」（「説話」の中の「世間話」との違いを、「人間の問題の内在」に求めている。益田は「型」を答えにはしていない。「出会いの文学」と「民衆の発見」とは等しいものではないが、「人間の問題の内在」が「民話」を貫いていると考えてもよいのではないか。

民話運動の中で、文化工作隊として人形劇上演活動をした瀬川拓男は、「現在の事実」を求めて「もうひとつの『遠野物語』を」めざした。「現代の民話」を第十二巻に用意した角川書店の『日本の民話』は、宮本常一らが執筆する『日本残酷物語』の影響下にある。瀬川の遺志を受けた「民話」の活動は「生活譚」を記録してゆく（根岸・二〇二三）。日本民話の会が戦争体験や被災体験を聞き続けることにも通じよう。

角川書店の『日本の民話』に関連するところとして、『男たちの大和』の原作者、辺見じゅんの著作にも目

配りしておきたい。「瀬川拓男・松谷みよ子編」で刊行された際には「再話」者とされていた「清水真弓」を「辺見じゅん」の名で「編者」に加え、八〇〜八二年にこの書は文庫化される。この間に、辺見には再話作品として『たおやかな鬼たち』（一九七九・角川書店）があり、巻末に「参考資料」として佐々木喜善、岩倉市郎、関敬吾、野村純一などの書籍を示す。この書物について、角川書店の広告は、「村歩きのみちみち、老婆からの聞き書きを主に、女の歴史を丹念に追い、そのしたたかにして、たおやかな生きざまを民話を通して描く」とある。入村する旅人が聞く、「忘れられた偉大なる人間苦の記録」の〈語り〉としての〈民話〉のイメージは、読者に歓迎されるものとして七〇年代末にあっても有効だった。

さて、瀬川や松谷と親交のあった野村純一は、松谷の『現代民話考』を『昭和版今昔物語集』の、しかも「本朝世俗部」である」と讃えた。『遠野物語』序文と重ね、「現在の事実」「戦慄」と結んでいるのであるが、基本的なまなざしは、「これはすでに独立した現代の説話集である」というものであった（野村純一・二〇〇三）。

野村純一は、説話すなわち「話になるやうな話」の意味において、「現代の民話」を評価したのである。

松谷自身は、『現代民話考』巻頭の「序文」において「あつたること」を強調する。それらは「むかしむかし」の話ではない。現代の民話に基づく『坊さまになつたからす』や小鳥前生譚の話型による創作『まちんと』——いずれも『日本の民話』第十二巻に収めた話、司修の絵によつて絵本化、偕成社から出版——を再版するにあたり、松谷は「むかしむかし」として受け取られぬよう結びに加筆している。松谷にとつて「民話」は語り継ぐべきもの、忘れてはならぬ話である。そして、児童文学者・松谷にとつて、「話になるやうな話」の枠は手放せぬものだったと思われる。

野村純一の「口裂け女」についての学問は、「話」になつていなかつた情報が「話になる」展開を示したことに注目したものであつた。「けり」の文学、説話としての型への注視が、「昔話伝承の研究」の基本的な視野であつた。

もちろん、〈忘れられた日本人〉のような〈語り〉の可能性を無視してはいたわけではない。六三年、『芸

能』第五卷十一号、十二号に、野村純一「鷹匠口語り——沓沢朝治・述——」が載る。「この口述は昭和三十八年八月二十二日、テープに収録したもので、できるだけその口語りを活かしたものである」と紹介し、「私」を主語とする「口語り」を文字にする。山で炭焼きをする仙人のような人物を、六十俵の農家が家に招いて鷹の扱いを伝授された、そうした記憶が「口語り」として報告される。

著作年譜を見ても、木地師やマタギへの強い関心を確認できる。けれどもその後、そうした〈語り〉とは異なる次元に学問を整えていった。「最初に語る昔話」(『国学院雑誌』第六八卷第二号)、『吹谷松兵衛昔話集』(自刊)が六七年。「昔話の研究」(『日本民俗学会報』五九号、六二号)が六九年、『萩野才兵衛昔話集』(自刊)が七〇年。「語り爺さ」「語り婆さ」が継承する「語り」は、稲作農家の囲炉裏端であるやうな印象を受ける。^(注四)

七 〈民話のふる里 遠野〉の形成

小鳥前生譚(五一 オット鳥、五二 馬追ひ鳥、五三 郭公と時鳥)も「し」で語つてきた『遠野物語』の語

り手は、「御伽話のことを昔々といふ」(一一五)が意識にかすめたその時に、「大いに叱りければ」(一一四ダンノハナ)と述べてしまう。「なりけり」という「気づき」はともかく、「けり」を用いずに織りなされた「現在の事実」が、「昔々」に脅かされる。

七七年に刊行された『遠野物語をゆく―柳田国男の風景―』(学習研究社)は、NHKテレビの番組を新たに編集したもの。巻末に「民話と心のふるさと 目で見える遠野ガイド」(資料・遠野市商工観光課提供)が載る。デイスカバー・ジャパンの中で、旅する学者のイメージが求められているのか、『遠野物語』の内容を津軽、男鹿、境田の柳田の旅が取り囲む。そんな遠野が高善旅館を移築して「とおの昔話村」を設けたのは八六年。読者に向けた語りが文字に綴られたと感ぜられもする、あの宿だ。平地民が「戦慄」する世界と「心のふるさと」とを鷹揚と抱えてきた遠野の物語は、「昔々」という「民間説話」による楔を駅近くに打ち込まれたのである。

『旅』八二年七月号、石堂淑朗「ああ、遠野の夜は更けて…」に、「民宿「曲り家」で遠野に伝わる民話

を鈴木まつさんから聞く」の写真が載る。三浦佑之は七八年に吉祥寺の百貨店で鈴木サツの語りを聞いた(三浦・一九九九)。入村する感興を観光資源にするため、語り部が民話の世界を都会に届けていた。

父の代わりラジオ取材にこたえたのが七一年。土淵村出身の佐々木喜善が媒介した『遠野物語』に記された「おしらさま」や「河童淵」を、土淵小学校校長だった福田八郎に教えられ(小澤ほか・一九九三)、綾織村出身の鈴木サツは、遠野を代表する昔話の語り部となる。福田は地元の人々に『遠野物語』や伝承の大切さを啓蒙した(石井・二〇〇二)。

ただし、「民話のふる里」が創成される頃、遠野の顔は鈴木ではなかった。昭和三〇年代から辿っておく。菊池照夫は『遠野物語をゆく』(一九八三・伝統と現代社)の「あとがき」に梅田取得や菊池幹ら六名の名を挙げ、「遠野に一人も観光客もはいらなかった三十年代ごろ、民俗博物館をつくるべきだ、これからは遠野物語の時代がくるとさげび、頭がくるっているのではないかと陰口をたたかれた仲間であった」と述べる。昭和四十年代を迎え、吉本隆明「共同幻想論」の『文

芸」への掲載が、六六年～六七年。単行本にされたのが六八年。三島由紀夫が『遠野物語』について「三嘆これ久しうした」と記したのは『波』七〇年一月号。経済成長の中で失われた「日本」が『遠野物語』にはあった。十月にはデイスカパー・ジャパンが開始される。

七二年八月二一日『報知新聞』「民話のふるさと 岩手県遠野市」の特集記事には「和田部落で親切にオシラサマの話をしてくれる北川深雪さん（七四）も相次ぐ学生の到来につかれ気味。デイスカパー公害は静かにしのびよってきた」とある。「民話のふるさと」として遠野が話題にされるようになった頃、北川ミユキの名が多く活字にされている。

石井正己は元遠野市助役・梅田収得との対談を通じて、「民話のふるさと」が七〇年の岩手国体に合わせて整備・発信されたことを確認、さらに元遠野市商工観光課長・菊池幹との対談には次のようなやりとりがある〔石井・二〇〇四〕。

石井 外からやってきたら、北川ミユキさんの所に行
くように勧めたわけですね。

菊池

そうです。原点になる先生方が訪れたところですから、オシラサマ見たいなら、北川さんの空き家に行く。（中略）あそこにお話しする人が、もう一人いたったのです。瀬川マサエ。瀬川マサエさんという方は、女で、美人だったね、背がすらーとして、そして歌を歌いながらお話しする。昔、馬を引っぱって歩いて、男勝りの駄賃づけという荷物運びしたお婆さんだから、そのお婆さんの家さ行く人と呼んだりす、あっちこっちでやったの。

瀬川マサエについての話題はこれで途切れる。「昔話の語り手の草分け的人物」であった北川から「語り部の創始者とも言える鈴木サツ」へとという展開を、福田八郎を軸に石井は描いている〔石井・二〇〇二〕の中で、石井の関心は瀬川には向かなかったのだろう。

七三年七月五日号の『an·an ELLE JAPON』「詩と民話の旅」特集で大きくとり上げられているのは、この瀬川マサエである。八三年、先ほど引用した菊池照雄『遠野物語をゆく』においても、「村の昔話・世間話」

の章に瀬川の写真が載るほか、「女馬子の唄」の節が用意される。ここには「意地で人生を生き抜いた女馬子・瀬川マサエ（明治二五年生まれ）」とキャプションが付され、片肌を脱いで左胸までを見せた迫力ある写真が載る。左近熊太翁のたくましさに通じるものが感じられよう。彼女が担うのは労働の記憶とウタ。「労働には笑ひがあり元気があり、機械もいやがる様な厄介な仕事で、兎に角まだすらすらと進んで居る」、そんな証言者であるかのような瀬川は、「民話」の世界を生きたる〈忘れられた日本人〉であった。本稿で紹介する複数の書物に同じ書名が重なることでも明らかのように、『遠野物語』は「ゆく」ことで追体験すべきものとして七〇年代の日本にある。それは「あつたずもな」で伝えられる民間説話の世界として単純化できるものではない。

七二年、NHK社会番組部編『新日本紀行 2 東北（新人物往来社）』に、「現代遠野物語」（執筆・高橋照彦）がある。写真^{（写真）}は十枚。駒形神社参詣の馬やオシラさまなど。その中に人物の写真は三枚。芸術家の岩間正男さん。「民話の舞台と風土をたずねて」の節に「駄

賃付をやった女馬方の瀬川さん」。「遠野の神「オシラさま」と昔語り」の節に「北川さんの昔語りは、情感にあふれていた」とキャプションの付く写真。

「民話を正確に語り伝える人」が少ない中、「われわれはその数少ないひとり、土淵に住む北川みゆきさんという七十三歳のお婆さんから、やつとのことで、オシラさまの話聞くことができた。北川さんは、いわゆる昔語りの調子をもっともよく伝えている人であるという」と本文に記される。観光客の喜ぶ「オシラサマ」の隣に昔話の語り手として北川ミユキが認知されていたのは、先ほど対談を引用して確認した通りである。瀬川については「駄賃付と峠道―ある老婆の体験」の見出しのある本文が用意されている。「遠野市の北部、土淵というところに、瀬川まさえさんという八十二歳の老婆がいる。土淵は、柳田国男に民話や伝説を語って、『遠野物語』のきっかけを作った佐々木喜善が住んでいた家のある村である」と始まり、瀬川の話す「峠越えのもよう」にオット鳥や仙人峠、笛吹峠、界木峠など『遠野物語』の記述が重ねられてゆく。そして、「現代遠野物語」の語り手も界木峠を越えて「昔

とほとんど変わっていない」自然と危険の迫る様子を実感する。

「現代遠野物語」を冒頭から読み直そう。小正月の人馬一体での駒形神社への参詣、サムトの婆。附馬牛に古い遠野の名残が「ひっそりと生きつづけていた」と、まず紹介される。次の段落は「東北本線の花巻駅から釜石線のディーゼルカーに乗りかえて一時間あまり」、北上山地に続き遠野の家々を車窓に見る。そして、語り手の入村に柳田の足どりが重ねられる。「明治

の末、遠野の人々木喜善から遠野に伝わる民話や伝説を聞き、その奇異な物語の舞台に強く心をひかれた。明治四十二年（一九〇二）八月、彼は遠野郷に遊び、一木一草にも頭を下げる気持をいだきながら馬に乗って盆地をめぐるという」という記述に導かれて引用される「花巻より十余里の路上には」という『遠野物語』の序文、それはもはや入村記に他ならない。

「紀行」と名のつく番組のゆえか、「現代遠野物語」は佐々木喜善の媒介を感じさせない。むすび近くでは「六十年あまり前、柳田国男が訪れて、その特異な自然、風土に興奮すら覚えたという遠野は、時代を現代にお

きかえれば、やはり同じような感慨を、訪れる人に与えることだろう」と言う。遠野において見て感じた柳田の足どりに、「現代遠野物語」の語り手そして読者の視線が重ねられる。語り手の前に、さらにそこに重なる読者の前に、「瀬川みつえ」「北川みゆき」が姿を見せる。むすびの前には菊池家の「オシラ遊び」。「馬」を軸に「新遠野物語」の描こうとする遠野像は明確である。

「民話のふるさと」を発信する遠野の「民話」は「オシラサマ」の物語であり、「人生を生き抜いた」物語だった。北川だけでなく瀬川の〈語り〉も視野に入れることによって、遠野が紡いでいたものが見えてくる。

馬と共に生き、馬と共に峠を越えた瀬川マサエの〈語り〉は、自身の直接体験を語るだけでなく、山々にウタを染みわたらせながら「けり」の世界へと滲み出してゆく。柳田国男が「けり」を使わずに表現したオシラサマの物語を、遠野が観光資源として「語り」始めた時、「あつたずもな」と「どんとはれ」とによって括り出される「語り」は、若者の訪れる七〇年代の観光の中で「日常」化する。宮沢賢治の花巻とも結びつ

けられたそれは、休日に味わう「詩と民話の旅」に格好の素材となっていく。だが、『遠野物語』の中に「現在の事実」は、私たちの日常ではない世界が炭俵を回転させるように接するところにある。若者を招き入れる中で薄れてゆくその緊迫感が、瀬川マサエの記憶する「峠」に残されていたのではないか。バスの行かない峠を知る瀬川の、人生の〈語り〉によって、遠野が「事実」とともにあることが可能になっていったのだと思われる。

民俗学徒が手放したくはなかった「入村」の感興、年寄りたちの〈語り〉。積み重ねてきたその足どりが、デイスカバー・ジャパンの憧れと重なる。民俗学という学問は、古代への遡源を唱えることよってのみ読者を得ていたわけではない。七〇年代の遠野における〈民話〉は、「民俗学」が人々の胸を打った〈語り〉の聞こえる学問であり、『遠野物語』が山々の間に響かせる幾重もの語りの声とともに読者に入村を体験させる書物であったことを、あらためて思い出させる。

八 むすび

「民話」運動は、民俗学に「民話」の語を拒絶させるに至る。民俗学者の理解の中で、「民話のふるさと」は学問の基本が理解されていない標語だということになる。^(注1) やがて、鈴木サツほか語り部たちが民話を語る観光地として遠野は認知される。地元の人々が「民間説話」をも学んだ遠野に「とおの昔話村」を導いたのは、「昔話伝承の研究」を仕上げたばかりの野村純一。その視野に瀬川マサエの〈語り〉はない。だが、宮本常一の文章を〈民話〉と考えてみれば、「民話」が抱いていた可能性が、意識されずとも、七〇年代の遠野に表現されており「民話のふるさと」を位置づけ直す必要がある、と気づくはずだ。

QOL^{クオリティ・オブ・ライフ}を重んじる今日、「ナラティブ語り」の「医療」といった見出しを見ることも増えた。^(注2)「語り」とは何か。医療や福祉の現場ならばともかく、民俗学徒である私たちには、カタカナとイコールで接続させる前に、庶民の生活や庶民の意識にふれた宮本以来の〈民話〉、現在の事実の〈語り〉を聞いてきた足どりを思い出しておく必要があるだろう。

【注】

- 1 三号(五八年十二月)―二一〇号(六〇年六月)の奇数の号。
- 2 初出時は「庶民の希い―広島島の農民―(平和と学問を守る大学人の会編『広島島の農村』(奥付の表記は『大学人会研究論集 第二集』一九五五・広島県教職員組合事務部)。人物は「丸山さん」として紹介されている。
- 3 『旅』七二年八月号は「特集 秘境を求めて」である。巻頭に「平家落人部落地図」が折り込まれ、宮本常一の文章も載る。「読者が寄せた秘められた旅先20」には、バスを降りて何十分歩く、終点から何分行く、といった記述が目立つ。
- 4 四二年三月の『民間伝承』第七卷第六号「食習調査状況報告」は、高木誠一などの名を挙げ、「我学界の大先輩が、老齢をもいとはず此の厳寒中を草履履きで採訪に従事されて居り」と記している。
- 5 重信幸彦「世間話再考」『日本民俗学』第一八〇号
- 6 石母田正「村の歴史・工場の歴史」『歴史評論』十二号(一九四八)、ふるかわ・おさむ「母の歴史を書こう」同四五号(一九五三)、「特集 母の歴史」同五七号(一九五四)。
- 7 第七号―九号の三冊を除く。
- 8 兵藤裕己は「けり」を「集団的な記憶の時制」と位置づけ、「むかし」は、こちら側の「いま」と背中合わせのかたちで空間を接して存在した」と考える。この文章は、神話と物語とを対立させる「近代的な文学概念」を批判するものであり、「誤解の出発点」に「柳田國男の「昔話」論」を置く(兵藤・二〇二〇)。言文一致や私小説を視野に入れないながら近代人柳田は、「けり」を用いずに物語を綴った。二〇例に満たない已然形「しか」よりは多いが、「なりき」「ありき」「あらざりき」が目立つ終止形「き」は一割五分強のみ。八割近くは連体形「し」が用いられている。
- 9 小川直之「口承文芸の文化学―野村純一の視座―」(『口承文芸研究』第四四号)は、「炉辺に蟄居する語りの秩序と序列」に注目、「昔話伝承の研究」を整理した。
- 10 七二年四月三日の放送によるか。
- 11 たとえば、宮本馨太郎・胡桃沢勘司「調査・研究」による『遠野』(一九七六・編集発行 観光資源保護財団)は、表紙に「―民話のふるさと―遠野」と示すものの、本文中には「民話」の語を一切用いず、遠野についても「民俗学の故郷」と繰り返す。なお小池淳一は、民俗学内部

の議論から「民話」の忌避を確認した上で、「研究上の区分が確立する以前の混沌としながらも魅力に満ちた地域」の伝承記録である『遠野物語』と、民俗学とは距離のある「民話」という語との重なりが「民話のふるさと」という表現に説得力を与え活用されていったと分析している〔小池 二〇一五〕。

- 13 日野原重明「二〇五歳、私の証あるがま、行く」二〇一六年十月二十八日『朝日新聞』

【文献】

- 石井正己 二〇〇二『遠野の民話と語り部』三弥井書店
 石井正己 二〇〇四『特集 遠野の自立と観光―『遠野物語』・昔話・町づくり―』『遠野物語研究』第七号
 大島建彦 一九六三「世間話のとらえかた」『西郊民俗』第一五号
 大月隆寛 一九九五「解説―かつて「残酷」と名づけられてしまった現実」『日本残酷物語 一』平凡社
 小澤俊夫・荒木田隆子・遠藤篤編 一九九九三『鈴木サツ全昔話集』鈴木サツ全昔話集刊行会
 木村哲也 二〇〇六『忘れられた日本人』の舞台を旅する』河出書房新社
 小池淳一 二〇一五「〈民話〉のふるさと」の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一九三集
 田中丸勝彦 二〇〇二「さまよえる英霊たち」柏書房
 野村純一 一九七五「民話の人物造型」『国文学 解釈と鑑賞』第四〇巻一二号
 野村純一 二〇〇三「松谷みよ子『現代民話考』―「現在の事実」に戦慄する―」『現代民話考』文庫版全十二巻パンフレット
 野村典彦 二〇二二「一九五〇年代の民話から「現代民話考」へ―瀬川拓男と松谷みよ子の「民話」―」『國學院大學栃木短期大学 日本文化研究』第五号
 野村典彦 二〇二二「民話Ⅱ昔話」観の消滅」『國學院大學栃木短期大学 日本文化研究』第六号
 兵藤裕己 二〇二〇『物語の近代』岩波書店
 益田勝実 一九五九「炭焼日記」存疑(二)』『民話』第十五号
 間所瑛史 二〇一八「齊藤隆介の創作民話とルポルタージュの方法」『世間話研究』第二二六号
 三浦佑之 一九九九「昔話と遠野物語―鈴木サツさんを偲ぶ

会―『遠野常民』八四号

三谷栄一 一九五二『物語文学史論』有精堂出版

宮本常一 一九五六a「書評 民話の会編『民話の発見』」『文学』第二四卷第五号

宮本常一 一九五六b「民話を保持する世界」『文学』第二四卷第一号

宮本常一 一九五八「伝承者の系譜」『文学』第二六卷第八号

吉沢和夫 二〇〇三「民話の半世紀をふりかえる」『聴く語る 創る別冊 特集 吉沢和夫』

吉本隆明 一九六六「共同幻想論」『文芸』第五卷第十一号

渡邊昭五 一九九五『文学と虚構―文学とは歴史とは何か―』

岩田書店